



東京都・私立
としまがおか
豊島岡女子学園中学・高校

進学実績の向上

授業力を向上し 教師への信頼感を高め 金レベルの生徒に育てる

◎旧加賀藩士夫人の河村常など4人の女性が設立した女子裁縫専門学校が前身。「道義実践」「勤勉努力」「一能専念」を教育方針として、道義、優しさ、思いやりの心を育む。授業前5分間の運針は、裁縫学校以来の伝統的な取り組み。和室・洋室での礼法授業など、しつけ教育にも力を入れる。

設立	1892(明治25)年
形態	全日制/普通科/女子
生徒数	1学年約320人
10年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、お茶の水女子大、東京大、東京学芸大、東京工業大、一橋大、名古屋大、京都市大などに146人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1273人が合格。
住所	〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-25-22
電話	03-3983-8261
Web Site	http://www.toshimagaoka.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎1990年代初頭、進学校へと脱皮を遂げるが、第1志望の入学者が少なく、意識が低い生徒が多かった

STEP 1

実践

◎授業の質の向上、教師の指導力向上、「進学通信」やクラブ活動の奨励などにより、学校への帰属意識を高める

STEP 2

成果

◎何事にも一生懸命取り組む生徒が増え、国公立大合格者数が安定的に100人を超えるようになる

STEP 3

生徒を「金レベル」に引き上げたい

豊島岡女子学園中学・高校は、東京・池袋に立地する私立の進学校だ。例年1000人以上が国公立大に合格し、東京大にも約20人が進学する。1990年代初めまでは短大進学や就職が主な進路先だった同校が、進学校へと舵を切り始めたのは80年代終わりのことだった。まず、89年度に、中学校入試日程を2月1日から2日へ移動させた。トップ校と重ならないように試験日を1日ずらすことによって、その併願先として学力の高い生徒を受け入れようと考えたのである。狙いは的中し、96年度入試で初めて東京大に5人が合格。98年頃には理系志望の生徒が増え始め、一定数が難関大に合格するようになった。

しかし、当時の生徒の意識を、総合企画部進路指導主任の十九浦理孝先生は次のように振り返る。

「当時は、本校に入学しても『本当はA高校に行きたかった』という気持ちを引かずのまままで、学校に顔が向いていない生徒が存在していました。難関大の合格者数が増えたといっても、そうした生徒の意識を学校に向けて、勉強やクラブ活動、毎日の生活も含めて頑張れる『金レベル』まで引き上げたい。そして、最後は『豊島岡女子学園でよかった』

「といって卒業してもらえない学校にしたいというのが、私たちの思いでした」

大胆な組織改編により 進路の発信力を強化

転機は2003年に訪れた。元國學院大教授の二木謙一校長が赴任し、大規模な組織改編が行われた。それまでは、校長・教頭の下に各学年、各職務分掌が横並びの関係にあった。横並びとはいつても、学年運営は学年主任に任せられ、学年によって指導のぶれがあった。

「その頃、私は10年ほど続けて3年生の担任を任されていました。長年3年生を見てい



豊島岡女子学園中学・高校
十九浦理孝 Tsuzunura Masataka
教職歴13年。同校に赴任して14年目。総合企画部進路指導主任。「努力は絶対に裏切らなご」



豊島岡女子学園中学・高校
菱沼洋介 Hishinuma Yosuke
教職歴10年。同校に赴任して11年目。教務部教務計画主任。「生徒の良いところを出来るだけ引き出した」



豊島岡女子学園中学・高校
中嶋淳 Nakashima Jun
教職歴6年。同校に赴任して7年目。総合企画部進路進学副主任。「どのような環境下でも、何に対しても全力で挑戦し続けた」

ると、学年ごとに指導のぶれがあることが分かります。表面的な学習に終始してきた学年は、受験が佳境に入るとプレッシャーに耐えきれず逃げ出す生徒が多くなることがありました。最後まで粘り強く頑張つて結果を出す学年もありましたが、学年ごとに指導方針や実績がぶれていては、生徒の信頼は得られません。豊島岡女子学園に来てよかつたと思わせるためにも、学年を超えて教師が意思疎通を図れる体制を整える必要がありました」(十九浦先生)

二木校長は、教務部の下に学年と教科、新設した総合企画部の下に進路、生徒会、学園生活などを置き、部署の主任は全員が同等な関係となる組織をつくり上げた。結果として、学校として統一した指導を行えるようにシフトしていった。

部署間の意思疎通は、それぞれ週1回開催される、総合企画会議、教科主任会議、学年主任会議で図っている。会議には、各部署のメンバーのほか、校長、教頭、教務部長、総合企画部長、進路主任などが出席し、それぞれの部署における課題の共有や方針の策定が行われる。

「以前は新しい企画を提案したいと思つても、どうすればよいか分かりませんでした。今は提案する場が確保されているので、若手教師も意見を出しやすくなりました」(十九浦先生)

「進学通信」で教師の思いを伝え 挑戦し続ける心を養う

03年度に進路指導主任に就任した十九浦先生は、新体制の利点を生かし、学年間のぶれをなくすことに努めた。まず、学年によって異なっていた模試を整理し、生徒に配布する進路情報誌や渡すタイミングも統一。05年度には全学年に向けて、週1回の「進学通信」(P.22図)を発行し始めた。

「学校全体として進路指導を推進していくために、教師の意思統一は不可欠です。生徒全員が最後まで挑戦し続けられるよう、『進学通信』に模試の結果や主要大学への出願者数などのデータを載せ、更に生徒に伝えたい言葉を書きました。『何事にも逃げずに挑戦し続けた先輩を見習って』『我々が出来ることは、辛くても頑張っている君たちを応援することだけ』など、一つひとつの文言に『金レベル』の生徒になつてほしいという私たち教師の思いが込められています」(十九浦先生)

成績下位層の底上げをしつつ 上位層にも刺激を与える

「進学通信」で生徒の意識付けを図る一方、何よりも重視したのは授業の充実だ。

「生徒の顔を学校に向けるために大切な

進学通信 Seize the Day!

2010年9月15日 高3進路指導委員会 vol.14

自分自身に嘘をついていない?

2学期になると毎年多くの生徒が、不安を抱きながら日々の生活を送るようになります。昨年、それに加えインフルエンザの不安もありました。特に、夏休みの学習がうまくいかなかったと思っている人が、このような状況に陥ることが多いようです。やはり、「もし、駄目だったら・・・どうしよう」と思ってしまう人が多いようです。その気持ちは十分にわかります。でも、だからと言って、自分自身にウソをつかないでください。辛いから、早くこの状況から抜け出したいからというので、第一希望である大学を棄て、より合格しやすい大学にしようと思うのは軽率です。なぜ、これまでがんばってきたのですか?

先輩の言葉・・・

毎年、大学受験が終わる、結果が出た時に高校3年生が合格の報告に来てくれます。君達の先輩であるAさん(この先輩は、第1希望であるT大学医学部医学科に現在通っています)が、受験結果の報告のために職員室を訪ねてきてくれたときに、進学先の大学に合格できたことを本当に喜んでいました。でも、この先輩はセンター試験で失敗して、T大学に出願するか、それとも他大学に出願するか悩んでいました。出願前に、その悩みの相談を受けた際、様々な可能性について話をしました。センター試験でこの点ならば2次試験でどれくらい挽回しないといけないのか、他大学ならば可能性はこれくらいであるとか・・・でも、私が最後に、「第1希望の大学ならば、出願しない。そして、2次試験で挽回してこい」という言葉を返しました。その先輩は、最終的にセンター試験の穴を、見事2次試験でうめて合格を勝ち取ってきました。私は、もしこれが他大学ならば合格しなかったかもしれないと思っています。最後まで、諦めずに努力し続けた結果、受かるべくして受かったのだと実感しました。

最終、高校3年生を見てきて、第一希望に合格している人に共通していることは、精神論ですが「諦めないこと」と「自分を信じていること」だと確信しています。

君たちならば、絶対に希望する進路を実現できるかと信じています。でも、大事なことは、私が信じておくことでなく、自分自身で自分のことを信じていることです。絶対に、合格するのだとね! これから大変な時期になるけども、受験勉強に正面から向き合おう。チャンスは、今、君達の目の前にあります。1年頃に「受験勉強で成長できたか」と実感できる途中経過を送りましょう。そして、受験が終わったときに、「諦めなくて良かった」と言えるようにね。

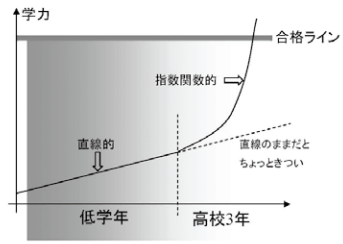
2学期のストーリー・・・

今学期で、授業も終わります。残された日々をうまく使えば、現役合格をつかむのは難しくありません。そこで、ぜひ、残りの日々をストーリーを再考してください。

「これからの時間の使い方が勝負の分かれ目!まだまだ途中経過の段階で、現役生はこれからどどんと伸びていく」ということを是非覚えておいてください。これまでも、似たようなことを進学通信や進路の冊子等で述べてきましたが、今一度、合格ストーリーを確認しておきましょう。

現役生の学力は、指数関数的に伸びていきます。本当に、受験前日まで伸びます。だからこそ、今の現状ですべてを把握しないことが必要です。模試で、結果が悪かったから、志望校を変えようと安易に思わないことです。

しかし、これは私の自論ですが、本校の生徒は定義域(時期)によって関数が変わります。下のグラフのように、本校の低学年の時は、朝のテストや各教科の小テストなどでコンスタントに学習する生活リズムができています。そのために、低学年の時期には、本校の場合、直線ですべてが変化していきます。男子校との他校比較を見てみても、そのような状況になっています。しかし、直線のままでは、最後の受験を乗り切るには、学力が足りなくなっています。合格している生徒をみると、それぞれに積み重ねてきた基礎が優れている。最後は、指数関数的に伸びていくのです。



は、何といてももしかしたら授業をすることで『この先生についていけば安心』という信頼感があるからこそ、生徒は最後まで粘り強く頑張れるのです(十九浦先生)

く、数学と関連付けた説明で生徒の関心を喚起する。「上位層は数学や化学への関心が高い生徒も多く、その知識と関連付けて説明すると、

中学1、2年生では成績下位層をつくらないことを徹底する。例えば、漢字や英単語、計算などの小テストを週1回行っているが、不合格だった生徒には追試を行う。その追試が不合格なら再追試として、合格するまでとことん追いかけろ。「これらのテストは努力をすれば必ず出来る内容です。逃げずに努力し続ける習慣を低学年時から身に付けさせるためにしつこいと思われても追試を受けさせます(十九浦先生)

より深く原理を理解させることが出来ます。難関大の入試問題も、背景にはそのような数学的な原理がかかわることが多くあります。授業でそうした考察を伝えることで、受験時にじわりと効くことを期待しています」英語の得意な生徒には法則名の英訳を教えるとするなり理解することがあるなど、得意教科からアプローチして理解を深めさせることもあるという。

授業見学と研究授業で教師の授業の質を高める

教師の授業力向上は、授業見学と研究授業を柱に進めた。授業見学は、非常勤講師も含め全教師が年1回、特定の日を決めて普段の授業を見る。見学した教師は授業後、簡単な報告書を見る。見学した教師は授業後、簡単な報告書を見る。見学した教師は授業後、簡単な報告書を見る。

研究授業は、年1回、教科の代表者1人が事前に作成した指導案の下で行う。同一教科の教師は原則全員が見学する。代表者の決め方は教科によってさまざまで、年齢順の場合もあれば、指名により特定の若手教師が代表となる場合もある。授業後の意見交換では、良かった点、改善すべき点を率直に話し合う。「全く駄目」という厳しい意見が出ることもあるという。授業のよしあしは「生徒を見ていてるかどうかにある」と十九浦先生は強調する。

「教科の専門知識はあって当然。真の授業力は『生徒をしつかり見る』『適切な表現力を身に付ける』の二つに尽きると思います。そして、授業では教え込まないことが重要です。答えをすぐに教えるのではなく、関心を高めたり考えさせたりすることで、生徒の力は更に引き出されるのです」

東京大の入試問題は その日のうちに解答を作る

近年は入試問題研究にも力を入れており、特に、センター試験や東京大をはじめとする国立大の個別学力試験の問題は、公表される端から解いていくという。数学担当の菱沼洋介先生はその狙いを次のように話す。

「入試問題は公表されたものから、すぐに解いていきます。特に、東京大は翌日まで必ず解いておきます。実際に解いているからこそ、アプローチに手間取った箇所なども分かります、それを伝えることで生徒も信頼してくれるのだと思います」

更に、教科を超えて十数人の教師が集まり、自分の入試分析の結果を公表することもある。

「担当教科だけでなく、他教科の情報を知っていただくと、担任としての信頼感も高まるのです」(十九浦先生)

ろで行うこともあった。「先生たちも勉強している」「自分たちのために頑張ってくれている」という生徒の思いが、教師や学校に対する信頼感を育むのである。

クラブ活動の活性化で 学校全体が明るく元気に

勉強以外の場面で、生徒に力を発揮させることも、同校は重視している。その鍵となるのがクラブ活動だ。クラブ活動は3年生まで原則全員が加入し、引退はなく卒業するまで「部員」である。

数年前からは、文化部を中心に活動の成果を披露する場を設けている。花道部は週替わりで玄関に花を生け、コーラス部と吹奏楽部の演奏による校歌のCDも出された。漫画イラスト部が作った学校案内は、校内で販売されている。

「発表の場があることで、生徒はより積極的にクラブ活動に取り組むようになりました。多くの生徒に発表の場が与えられることで学校全体が明るくなった気がします」(中嶋先生)

ここ十数年の改革が実り、同校では進学実績が躍進し続けている。毎年、国公立大合格者は100人以上、早慶上智の合格者は300人を超えている。08年度入試では12人だった東京大合格者は、10年度には24人に倍増した。

「何よりうれしい変化は、生徒が勉強以外のことにも前向きに取り組むようになったことです。勉強で自信を付けた分、クラブ活動でも頑張れるようです。まさに勉強とクラブ活動は両輪だと実感しています」(十九浦先生)

まさに「金レベル」の生徒が育ちつつある。更に教師も変わった。若手教師も活発にアイデアを出し、それが学校全体に活気を与えている。菱沼先生は学校の様子を次のように話す。

「職員室には教師がざつくばらんに話し合える雰囲気があります。アイデアを出し動き始めるまでのスピードも速くなりました。教師一人ひとりが個性を發揮できる場が、ここにはあるのです」

課題は、より深い洞察力、課題解決力を持つ生徒を育てることだと十九浦先生は話す。

「進学実績は順調に伸びていますが、第一志望校に入ったものの、目的を見つけられずに悩む生徒がいるのも事実です。何のために大学に行くのか、社会に出て何をしたいのか、教師が与えるのではなく、自分の中から答えを見つけてほしい。そのためには、自分で課題を見つけ、解決できる力を身に付けてほしいと考えています。日本の将来を担う子どもたちを育てているという気概を持って、その力を最大限に發揮できる教育を目指していきたいと思います」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「東京都・私立吉祥女子中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)